●せいてん質問箱

阿弥陀仏が人格的に表現されているのはなぜ？

●質問●

阿弥陀仏は光明であると言われていますが、人格的に説かれているのはなぜですか？

□仏はみな人格的？

この質問は、仏のさとりのはたらき、あるいはさとりの世界というものについて、真剣に考え、また、親鸞聖人の書かれたものをしっかりと読まれた上での質問なのでしょう。

しかし一般的には仏や菩薩はみな人格的に描かれているものです。また、人格的に描かれてはじめてその仏や菩薩がどのようなさとりの仏であるのかが知られるのではないでしょうか。

私たちの身近には仏や菩薩に対するさまざまな信仰がありますが、それらはみな、仏や菩薩が人格的に表現された物語の中で、その仏や菩薩の慈悲の心や救いのありようを受けとめるところで育まれたものです。そのことは阿弥陀仏もまた同じなのです。

□他者としての仏

そして、私と他者である仏という関係の中で、はじめて「救う・救われる」ということも成立します。そうした意味で阿弥陀仏が人格的に表現されるのはむしろ当然のことといわねばなりません。阿弥陀仏が因位の時、法蔵菩薩として五劫思惟の願をたて、兆載永劫の行を修めていただいたということの中に、私たちは自身に向けられている如来のはたらきを知り、またそのはたらきにまかせるほかに迷いの世界を抜け出すことのできない私自身の姿を知らされるのでしょう。

そして私たちが大切にしている御本願ということも、基本的には「願い」ということなのですから、誰かが私に対して願っているということです。そのことを私が考えるときには、やはり人格的な仏として阿弥陀仏を考えるように思います。

それから、曇鸞大師が、私がお浄土に生れさせていただくはたらきのことを「他力」と表現してくださったことも無関係ではないでしょう。他力というのは私以外のもののはたらきということです。他力とは本願力であり、仏力であるのですが、曇鸞大師がそれを他力と表現されたのは、私以外の他者のはたらきということを示そうとされたものでしょう。他者ということを考えるときにはやはり一つの人格を考えているはずですから、他力という言葉も人格的表現の一つであると思います。

□救われていく私

一方、救われていくこの私自身を私がどう考えているかというと、当然ですが、一つの人格として考えているはずです。私が如来の大悲に摂め取られて浄土に往生し、仏のさとりをひらかせていただくということも、さらには、浄土に往生したなら、ふたたび穢土へ還り来て有縁のものを救い取るはたらきをさせていただくということも、私自身を人格的に捉えた上での表現に他なりません。私たちは弥陀同体のさとりを開かせていただくのですから、同じ問題です。

阿弥陀仏が救うということも、私が救われるということも、私たちは人格的な表現の中で受けとめているのです。

□親鸞聖人の表現

それでは、この質問が見当外れのことを訊かれているのかといえば、そうではありません。

なぜなら親鸞聖人は、

この報身より応・化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧光を放たしめたまふゆゑに尽十方無礙光仏と申すひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず、無明の闇をはらひ悪業にさへられず、このゆゑに無礙光と申すなり。無礙はさはりなしと申す。しかれば、阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとしるべし

（『唯信鈔文意』、七一〇頁）

等とも述べられているからです。おそらくこの質問は、そうしたことを踏まえた上で尋ねられたものと思いますが、それでは親鸞聖人はどうして阿弥陀仏を光明と表現されているのでしょう。光明と表現することで何を伝えようとされているのでしょう。

□光明は智慧のかたち

右の文の中では、「無明の闇をはらひ悪業にさへられず、このゆゑに無礙光と申すなり」といわれていますが、つまり阿弥陀仏の光明は私たちのどんな悪業にも障げられることなく私たちにとどき、私たちの無明の闇をはらってくださるというのです。つづいて「しかれば、阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなり」といわれているのは、そのように障りなく私にはたらいてくださっているのであり、それは如来の智慧のはたらきに他ならないということです。阿弥陀仏とは、私に関係のないところに存在しているのではなく、現に私にはたらかれているのであり、そのはたらきそのものが阿弥陀仏であると示されているのでしょう。

阿弥陀仏が光明であると示されていることは、人格的な表現を否定しているわけではなく、無礙自在に私にはたらかれているということを示されているのです。阿弥陀仏は無礙光仏以外にも「清浄光仏」「歓喜光仏」など、さまざまな光の仏として表されますが、それもまた如来が私にはたらかれていることを示しています。親鸞聖人の『弥陀如来名号徳』という書物にはそのはたらきについて詳しく解説されています。

□かたちもましまさず

一方で聖人には「かたちもましまさず、いろもましまさず」という表現も見られます。右の文ではその直前に「尽十方無礙光仏と申すひかりにて」とありますから、阿弥陀仏が光明であり、無礙のはたらきをもって私を摂め取るということを示そうとされているのでしょう。親鸞聖人が如来のことを「かたちもましまさず」と示されているところを見ていくと、如来の無礙のはたらきを示すほかに、そのさとりが無上のものであることを示しているところもあります。これは如来のさとりが特定のかたちをとるような限定的なもの、有限のものであることを否定しておられるのでしょう。「光明は智慧のかたちなり」と示され、「かたちもましまさず、いろもましまさず」と示されているのは、ともに私に対する如来のはたらきがこの上ないものであることを示しているのです。

□救いのはたらき

このように見ていくと、阿弥陀仏が人格的に表現されることも、光明と表現されることも、私に向かって如来のはたらきが間違いなく届いているということを示しておられることがわかります。また、「かたちもましまさず、いろもましまさず」「光明は智慧のかたちなり」と示されているのは、そのはたらきは無上にして無礙のものであり、現に私はそのはたらきに摂め取られているということを示されたものなのです。

（本願寺派司教　安藤光慈）